

## 明治大学出版会の設立



2011年度  
編集委員長  
居駒 永幸(経営学部教授)

### 出版界へ、明治大学リバイブックス

本学創立130周年の記念すべき年に、明治大学出版会が設立されました。正確にいえば約50年ぶりの復活になるのですが、何もないところから始めるのですから新設と同じでした。昨年7月、運営委員会のもとに編集委員会を立ち上げ、4名の編集委員の先生方とともに今年度の出版に向けて全力で取り組んで参りました。

編集委員会ではまず、明治大学の特色ある研究を広く社会に発信していくために、研究に基づく学術的な内容の教養書を叢書として刊行していくという方針を打ち出しました。学術的教養書を目指した理由は、専門的な研究書は人文・社会・科学技術の3研究所から毎年出版され、また海外発信支援委員会による海外向けの英訳出版事業も始まりましたが、本学では教養書刊行への支援がなかったからです。本学からの知の発信において、この分野の充実こそ最優先課題になると考えました。今年度の刊行では、時間が限られていることもあって公募とし、その中から採択することになりました。10月末までに7件の応募があり、編集委員会でも何度か検討した結果、叢書として2

冊、それとは別枠で1冊を刊行することが決まりました。いずれも第1回出版にふさわしい、すぐれた本になると思っております。この3冊をはじめ、応募していただいた先生方には心から感謝いたします。叢書の正式名称も「明治大学リバイブックス」と決まりました。これからの編集・出版作業は丸善出版に委託することも決定しました。

きわめて短い期間でしたが、編集委員会として何とか第1回の刊行までこぎつけました。今年度の3冊は、これが明治大学出版会の本だ、という評価を確立していくための第一歩となるわけです。一世紀をはるかに超える本学の学術研究が、学術的教養書の刊行によって広く一般の方々にも受け入れられ、より一層の社会連携、社会貢献を重ねていくことが明治大学出版会に課せられた役割であります。本学に蓄積されてきた研究はもちろん、文理を超えた新領域や最先端の研究からの発信も、今後の「明治大学リバイブックス」に求められることとなります。最後に、これまで実務的な作業を進めてくださった研究知財の事務局に深く感謝申し上げます。

## 明治大学リバティブックス

### 『ピリー・ワイルダーの映画作法』

瀬川 裕司著(国際日本学部教授)

【内容紹介】 ピリー・ワイルダーは単なる〈巨匠〉ではない。彼はコメディ、法廷劇、政治風刺、戦争映画など作品ごとに異なったジャンルに挑み、いずれもすぐれた成果をあげた稀有な映画作家なのだ。観客に気づかれにくいレベルで多くの仕掛けを施し、緻密に物語世界をつくり上げた監督・脚本家ワイルダーのテクニックの深層に迫る。



### 『中国・台湾・香港映画のなかの日本』

林 ひふみ著(理工学部准教授)

【内容紹介】 陳凱歌、張芸謀、侯孝賢、楊徳昌、王家衛……。中国、台湾、香港出身で、20世紀末の国際映画祭を席巻した監督たちは、いずれも戦後生まれながら、例外なく日中戦争のトラウマを作品に映し出していた。そして二一世紀。中国の馮小剛、台湾の魏徳聖が生み出した記録的大ヒット作のクライマックスシーンで日本語の歌が流れ、観客の心を癒した。日本と中国語圏の近現代史を映画によって読み直す。



### 『陸軍登戸研究所<秘密戦>の世界 —風船爆弾・生物兵器・偽札を探る—』

明治大学平和教育登戸研究所資料館、山田 朗編(文学部教授)

【内容紹介】 大学キャンパスのルーツをたどるとそれは日本陸軍の〈秘密戦〉研究所だった。陸軍登戸研究所で秘かに行われていた風船爆弾・暗殺用毒物・動植物抹殺のための生物兵器・偽札・スパイ機材などの開発・製造。60年以上封印されていた〈秘密戦〉の歴史を、新たに開設された資料館の展示と残された遺物によってここに復元する。

